2013年度入学試験問題

国　　語

(試験時間　15：00～16：00　60分)

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

情報社会に生きる現代人にとって、W・リップマン（Walter Lippmann）の名を失することはできない。一九二二年に出版された彼の主著『世論』は、情報と人間・社会との関連について今もなお有効な視座を提供してくれるからである。ハーバード大学で主に哲学を学んだリップマンは、現実の流動的社会に興味を抱き、卒業後ジャーナリズムや政治の場に身を投じた。直観にみちた彼の主著も、このような現実世界の経験を通して生れたといえる。

第一次世界大戦の折に、時の大統領ウィルソンに請われて彼は戦争終結時の停戦条約の起草にサンカク(1)する。この「十四カ条」の条文をめぐってヴェルサイユで協議と調印が行われたが、この政治過程を観察してリップマンは失望する。なぜなら、会議に臨んだ当事国の政治的信念はたがいに大きく相違していたばかりでなく、条文それ自体が個々に部分的な矛盾を含んでいたが、それにもかかわらず、(2)政治家たちはそれらを十分に考慮することなく協定を結んだからであった。事実、リップマンの予想どおりに間もなくこの条約は有名無実なものと化したが、リップマンはこの政治過程から(3)彼の洞察を引き出した。なぜ政治家たちは現実認識において無知でありえたのか。彼らは現実についての正確な認識にもとづいて行動していたのではなく、現実から離反した現実についての観念を頭の中で勝手に構成し、その観念にもとづいて行動したために、現実との間にズレが生じたのであった。ここから、リップマンの著書の主要な論拠となる概念（擬似環境）がもたらされることになった。

日常生活におけるわれわれは、自ら直接に接触したり経験したりできる諸対象にとりかこまれて暮らしている。われわれの行動は対象に関する精確な知識にもとづいて(4)遂行される。たとえ知識と行動とが不適合であったとしても、少なくともわれわれは自己の能力でそれを調整することが可能である。このような環境をリップマンは「現実環境」（real environment）とよんだ。これに対して、われわれの行為や認識の対象（事実や出来事）が、何らかの障害により直接に接触したり確認する(5)方途が妨げられるとき、われわれは現実環境のかわりの環境を創り出さざるをえない。たとえば、対象が空間的・時間的に隔てられていたり、あるいは対象自体があまりにも広大で複雑であるため個人の能力では認識することが不可能である場合などがこれにあたる。こ

のときわれわれは現実環境それ自体を把捉しえないゆえに、それにダイタイ[6]する映像（picture）を自己の頭の中に思い描き、この映像を自己の環境と思い定める。この頭の中で構成され、単純化されたモデルをリップマンは「擬似環境」（pseudo-environment）と名づけた。リップマンによると、現代人は膨大でしかも複雑タキ[7]にわたる現実にとりかこまれて生きることを余儀なくされており、それゆえに擬似環境にたよらざるをえなくなっている。

ところで擬似環境は現実環境のかわりに頭の中で構成されたイメージの複合体であるから、当然、現実環境との間に認識上のズレが存在するはずである。(8) われわれは、擬似環境を真の自己の環境と考えてそれに向けて行為する。(9) われわれの行為の結果は擬似環境にではなく現実環境に及ぶことになり、われわれの予想しえない事態が現実環境からリアクションとしてかえってくる。(10) 擬似環境と現実環境との認識上のズレが反応上のズレをもたらすのである。リップマン以後、現実環境と擬似環境とのズレは、オリジナルとコピー（清水幾太郎）、現実と地図（S・I・ハヤカワ）、現実と幻影（D・J・ブーアスティン）などのズレとして考察されるが、究極のところ実在と表象とのズレといってよかろう。交通や通信などの諸手段が高度に発達した現代社会では、擬似環境の拡大化が必然的にもたらされるが、実在（現実環境）から離反した表象（擬似環境）に支配されるならば、われわれの行為はますます現実からかけはなれたものとなってしまう。その結果、確実な行為のための基盤が崩壊のキョウイ[11]にさらされることになる。ここにリップマンの現代社会に対する憂慮が生れた。以下ではその憂慮のうち三点にわたって述べておきたい。

さて、まず第一点は、現代人がステレオタイプ（世界についての固定的・画一的な観念やイメージ）に支配されやすくなるという指摘である。われわれは社会構造内に一定の地位を占有しており、伝達される情報を地位に付随する文化（解釈カテゴリー）によってタイプ化する。たとえば、「陽気なアイルランド人、論理的なフランス人、規律正しいドイツ人」などという具合にである。文化に蓄積された解釈のためのカテゴリーばかりでなく、われわれは個人的経験、友人・知人から受け取った断片的知識、想像、などを通して獲得された「雑多なステレオタイプ」を所有しており、これらをも対象世界のタイプ化に動員する。このようなステレオタイプは、タイプ化の作用によって対象世界に秩序を付与する。この秩序は認知的次元だけでなく、情動的

次元にまで及ぶ。なぜならステレオタイプは個人や集団の感情や情緒と結びついており、一種の道徳観や世界観にまで達しているからである。それゆえに理解（解釈）しえない事態の生起は、認知的次元を越えて情緒的次元にまで及ぶゆえに、われわれに大きな不安を引きおこさずにはいない。[12] 擬似環境の拡大とは、このような不測の領域の拡大を意味しているから、われわれはステレオタイプへの依存度を強めざるをえないことになる。

さらに、先に述べたように現実環境と擬似環境との認識上のズレは反応上のズレを生ずるが、行為の上における不測の反応はわれわれをますます不安に陥れるために、われわれに現実環境を回避させるように作用する。その結果われわれは現実環境と擬似環境とのズレを自己増幅させることになる。ステレオタイプは、現実との接触を通してゆがみや誤差を修正され、硬直化を低減させられるのであるが、現実回避の増大はステレオタイプの体系の自動化メカニズムを生み出さずにはいない。つまりステレオタイプは体系内で自己増殖し、今度は逆にステレオタイプを積極的に外部の世界に投影するのである。ステレオタイプの中で前もって前提とされている諸特性が逆に対象の内で解読され、「思いやりの深い人びとが親切の理由を見出し、また悪意ある人びとが悪意を見出す」ことになる。こうして、両環境のズレとステレオタイプへの依存化傾向とは悪循環を形成し、その結果われわれは現実から遊離した自己中心的な偏見や先入観にますます強くとらわれることになる。

第二点は、事実とイメージ所有者との間に媒介者が要請され、この媒介者によって現実環境と擬似環境とのズレが増幅されやすいことである。マス・メディアの驚異的な発達は、コミュニケーション可能な領域を拡大させることでもあった。しかし新聞やラジオ・テレビで報道される情報は、事実を観察した記者の報告にもとづくものであり、またこの報告は多数の人びとの手を経た（たとえば編集者による規格化）後に受け手に伝わる。このため現実は幾人もの頭脳の映像化過程を濾過（ろか）してきたものであるために、多様多重な変形をこうむらざるをえないはずである。さらに報道は、積極的にズレを増幅させる作用を行使する。受け手の側は日常の生活に追われているため、報道の照合や考察の余裕も能力をも持ちあわせない。しかも彼らに理解しえない事実の報道は彼らを困惑に陥れるから、彼らは可能なかぎり自分たちのステレオタイプに適合する報道を歓迎しやすい。こうして報道は事実を単純化（たとえば善玉、悪玉の創出）したり、解読の暗示を与える記事を同時に掲載する。また報道は世論形成と

いう名目の下で、「シンボル操作」を行い、読者の個々の意見の相違を無視して統一的意見の形成へと導く。シンボルとは「ほとんどなんでも意味する言葉」であり、受け手の理性よりも感情や情緒にうったえる言葉である。受け手は権威あると認める人たちが使用するシンボルによって、個々の意見の相違や対立を忘却して感情的な一体感の達成をもとめる。たとえば、リップマンによると「アメリカ主義」というシンボルは、保守主義者と進歩主義者との両者から同様に支持されてきた。報道におけるシンボル操作は読者を事実から遠ざける結果となりやすい。こうして報道による現実環境と擬似環境のズレの増大は、未開社会の人びとや子どもに顕著な未分化な思考様式（たとえばセンセーショナリズムへの嗜好）を培養させやすい。

第三は先の第一、第二の指摘にもとづく憂慮である。「民主主義の実践は新しい時代に入った。いかなる経済力の変化よりも、無限に意味の深い革命が起こりつつある」とリップマンが述べたように、環境の根本的変化が近代社会の主要な政治制度である民主主義を変質させざるをえない、という指摘である。ルソーに代表される十八世紀の啓蒙思想家たちは、次の二つの前提にもとづいて人民主権の理念を説いた。すなわち、一つには、民衆の個々人は先天的に政治的能力にめぐまれており、自分の判断で物事を決定し実行しうる個人であること。二つには、民衆の意見は事実に関して同一な見解にもとづいた「共通の意志」を形成し、ありとあらゆる物事の動きを洞察する神の声であるという前提であった。しかしこのような暗黙の前提は、ルソーやジェファソンが想定した外部社会から隔絶された封鎖的で自立的な比較的小さな集団においてのみ該当する。なぜなら、そこにおいては、人びとはほぼ直接に接触し確認しうる現実環境の内に生活しているのであり、自己や世界に対して確実で正確な知識を所有しうるからである。環境が「万人の直接的かつ的確な知識のとどく範囲内に限定され」てこそ、個人主義も民衆の合意（(13)）も可能になるのである。ところが上に見たように、擬似環境に住むことを余儀なくされる現代人は、環境に対する直接的で的確な知識を持ちえないだけでなく、偏見や先入観に支配されるために、行動のための自立的な判断を持ちえない。さらに、マス・メディアは両環境のズレを拡大するだけでなく、民衆の非合理的な心情へのアッピールを行うために、人びとを合理的で理性的判断の所有者である公衆から非合理的で感情的な大衆へと変化させる。こうして「われわれの考えつく限り、いついかなる時においても見えない環境の全体がすべての人びとに明らかになり、その結果、彼らが政府の任務のすべてに対して

健全な世論を自動的に作り上げる見込みはほとんどなくな」っており、われわれは「民主主義が矛盾の危機に逢着(ほうちゃく)している事実を骨身にしみて感じ」ざるをえない状況を迎えているのである。(14)

（亀山佳明「擬似環境と民主主義との矛盾（W・リップマン）」〔作田啓一・井上俊編『命題コレクション　社会学』〕による）

〔問一〕　傍線(1)(6)(7)(11)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕　傍線(4)(5)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

〔問三〕　傍線(2)「政治家たちはそれらを十分に考慮することなく協定を結んだ」とあるが、それはなぜか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　政治家たちは協定の条文について精確な知識を持ってなかったから。

B　政治家たちは協定の条文を自分たちの都合のよいように解釈していたから。

C　政治家たちは、現実認識において自分たちが無知であるのに気づかなかったから。

D　政治家たちは自分たちの持つ観念が現実からかけ離れていることに気づかなかったから。

E　政治家たちは、政治的信念が互いに異なっているという現実を正しく認識していなかったから。

〔問四〕 傍線(3)「彼の洞察」とはどのような洞察か。その説明としてもっともふさわしいものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A ヴェルサイユ条約が有名無実と化したのは、ヴェルサイユに集まった政治家たちが現実環境とはかけ離れた擬似環境を頭の中で作り上げ、それに依拠して協議し調印したからであるという洞察。

B 現代ではステレオタイプという表象に依拠して実在を理解しようとする傾向がますます強まり、もはや実在と表象とを区別する手段すらなくなってしまっているという洞察。

C 人間と現実環境との間には擬似環境が挿入され、人間は擬似環境に対して直接に反応するために、行為が現実環境にうまく対応しないことが起こるという洞察。

D われわれは頭の中で擬似環境を作り出しそれに依存することによって、現実環境においてさまざまな不測の事態が起こる可能性を低減させているという洞察。

E 現代人は、対象についての精確な知識よりも、自分の頭の中で勝手に構成した観念に基づいて行動することを好むようになっているという洞察。

〔問五〕 空欄(8)(9)(10)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはならない。

A つまり　B あるいは　C ところが　D しかも　E むろん　F たとえば

G さらに

〔問六〕 傍線(12)「擬似環境の拡大とは、このような不測の領域の拡大を意味している」とはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 感情は合理的に理解できるものではないので、人びとの感情や情緒と結びついた擬似環境の領域が広がることは、合理的には予想しがたい事態が起こる可能性を高めること。

B 人びとが擬似環境を作り上げる対象領域が広がるほど、現実環境とのズレが広がるため、人びとが現実環境へ働きかける際に予想もしなかった事態が起こる可能性が高まること。

C 複雑な現代社会に住むわれわれは擬似環境を広げざるをえず、行為は現実世界からかけはなれ、そのリアクションとして予想しがたい事態がかえってくる現実の領域が広がること。

D 理解しがたい現実は人びとを不安にさせるので、そのような領域が広がれば広がるほど、不安を押さえるために、自分にとって望ましい擬似環境を勝手に構成しようとする傾向が強まること。

E 対象世界に秩序を付与するために作られた擬似環境は、人びとの道徳観や世界観の改変につながる可能性があり、その拡大は、われわれのものの見方が思いがけない方向に変化する可能性を高めること。

〔問七〕 空欄(13)に入れるのにもっとも適当な四字の語句を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問八〕 傍線(14)「民主主義が矛盾の危機に逢着している事実」とあるが、その「矛盾の危機」とはどのようなことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　現実環境について直接的で的確な知識を持たず、擬似環境に依存して暮らさざるをえない現代人は、各人が自立的な判断で物事を決定し実行しうるという民主主義の前提条件を満たすことができなくなっていること。

B　マス・メディアが、「シンボル操作」を通じて一定の方向へと世論を誘導することで、個々の意見の相違や対立を失わせ、人びとが民主主義の前提となる健全な世論を自ら作り上げることができなくなっていること。

C　マス・メディアはすべての人びとに、直接に接することのない幅広い領域について判断に必要な情報を提供してくれるが、その情報はタイプ化などの単純化を施されているゆえに理性的な判断を損なっていること。

D　マス・メディアは、幅広い人びとの間で統一的な見解が形成されることを可能にしているけれども、かえって人びとの目を現実環境からそらし、政府の任務について感情的に判断する傾向を助長していること。

E　コミュニケーション可能な領域が大幅に拡大している現代においては、民主主義的な政治判断の対象を、万人の直接的かつ的確な知識のとどく範囲に限定することがもはやできなくなっていること。

〔問九〕 次の文ア～エのうち、本文の主旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　現代人は物事の認知に際して情緒的に判断するようになっているので、マス・メディアによるシンボル操作にたやすく支配されるようになっている。

イ　マス・メディアは、異なる意見の人とでも感情的な一体感を持ちたいという受け手の願望を利用するシンボル操作によって、人びとの多様な意見を一つにまとめ上げている。

ウ　人びとが自分自身では確認することができない広大な領域の事柄について判断を求められる現代においては、マス・メディアは社会の現実を知らしめる媒体として有効に機能している。

エ　一旦ある対象についてステレオタイプが成立すると人は、現実との接触を通じてそれを修正することもあるが、ステレオタイプに合うように対象を理解しようとして対象への偏見を強めることが多い。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

第一次大戦後の時代に世界を侵しはじめた「群衆」なる二〇世紀的な人間の存在様式。その異様きわまりない存在様式に、はじめて正面から徹底した考察を加えたのは、たぶんスペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットだろう。一九三〇年に発表された『大衆の反逆』では、次のように指摘されている。

密集、充満という事実は、以前はしばしばあることではなかった。それが今日、どうしてありきたりのことになったのだろうか？

こうした群衆を構成している人びとは無から生じてきたのではない。十五年前にも、おおよそ現在と同数くらいの人間が住んでいた。第一次大戦後は、人口数がむしろ減少しているとみるのが当然だろう。しかしながらここにおいて、われわれはまず第一の重要な問題点につき当たるのである。つまりそれは、こうした群衆の構成する個人個人は前から存在していたが、しかし群衆としては存在していなかったということである。（略）個人もしくは小集団は、それぞれが一つの場所を、おそらくは彼らだけの場所を、原野や村や町や大都市の一区画に占めていたのである。

（桑名一博訳）

オルテガによれば群衆現象は、第一次大戦後の時代に無視できないものとして、新たに観察されはじめた。後に群集として都市の街路を満たす人々は、戦前には「個人もしくは小集団」として、それぞれに固有の場所を与えられていた。オルテガの「小集団」は、カネッティが『群衆と権力』で「群衆」と概念的に区別している「群れ」に相当するだろう。固有の場所から切り離された個人や解体された小集団の残骸（ざんがい）が、大戦後に群衆として登場するにいたる。またモスコヴィッシも、群衆あるいは大衆という「その言葉は、フランス大革命以来、日常の言葉のなかにしばしば舞いもどってくる。けれども、その言葉の意味を精密化し、それに科学的意味を持たせるには、二十世紀を待たねばならなかった。大衆とは、平等で無名の互いに相似た個人の、束の

間の集合体であり、その中にあっては各人の諸観念とさまざまな情緒が自然発生的に表出する傾向を持つ集合体なのである」（『群衆の時代』吉田幸夫訳）と述べている。

(1) 文中の「二十世紀」には、二〇世紀初頭のベル・エポック期は含まれていない。では、どんな理由で第一次大戦後の時代に群衆が、人間の支配的な存在様式として新たに生誕したのか。一八世紀の産業革命と市民革命は前近代的な共同体を急激に解体し、独立自存の近代的個人の時代をもたらした。大量に誕生した近代的個人とは、ようするに個体化された共同体にほかならない。周囲から孤立した自己完結的な主体は、かつて共同体であり、そして近代においては個人なる存在が、それに匹敵する特権的な小宇宙としての地位を獲得する。

だから近代的個人には、固有の内面性というロマン主義的な神話が信じられてもいた。社会は無数の個人で構成されているが、それは群衆のように「平等で無名の互いに相似た個人」の無構造的な集積ではない。この私は、他人と交換不能である固有領域をなしている。そのような私が相互に契約を結びあうことの結果として、近代的な市民社会が構成される。だから私は、市民社会という公的な場において、果敢に自己実現を試みる能動的な主体でもある。ルソーの『告白』、ゲーテの『ファウスト』、スタンダールの『赤と黒』、等々の近代文学の古典はいずれも、そうした近代人が存立する論理を説得的に明らかにしている。

(2) 、猫の額のような土地を争奪して四年間に七百万の戦死者を数えた第一次大戦の経験において、ファブリス・デル・ドンゴからトニオ・クレーゲルにいたる近代小説のヒーローは、機関銃で掃射され毒ガスで窒息させられて、英雄的ならざる大量死をとげたのである。塹壕戦で大量殺戮された私は、もはや独立自存の特権的な主体、自己完結的な主体ではありえない。ようするに産業廃棄物さながらのボロ屑である。理想を求めて奮闘した近代的な私は無意味に殺害され、膨大な屍体の山を築きあげた。七百万の塹壕戦の死者とは、モスコヴィッシのいわゆる「平等で無名の互いに相似た個人」それ自体である。

「死が生を捉える」とは、死んだ労働の凝固物である資本が生きた労働を支配する事態を示すために、マルクスが引用しているヘーゲルの警句である。同様にグレート・ウォーを生き延びた生者は、必然的に塹壕戦の死者の存在様式を模倣しはじめた。ここでもまた、死が生を捉えたといえる。

(3) 大量死は必然的に大量生に転化し、オルテガに「彼らには『中身』が、つまり頑として他人のものとなることを拒否する譲渡不能な彼自身の精神が、取り消すことのできない自我が欠如している」と批判された群衆存在が、否定しえないものとして生じた。機関銃の無差別掃射の前では、貴族も労働者も英雄も卑怯者も区別はないのである。近代小説のヒーローが探求した内面的価値は、もはや前提から崩壊している。戦争で大量殺戮される運命の私にとって、近代人の高貴な精神性など、「頑として他人のものとなることを拒否する譲渡不能な彼自身の精神」など空疎な美辞麗句にすぎないだろう。

(4) オルテガは「現在ヨーロッパとその隣接地帯で行われつつある二つの『新しい』政治的試み、つまりボルシェヴィズムとファシズム」を、「両者とも野蛮への後退なのだ。そして、過去全体を消化しようとせずに、単純に過去のあの部分この部分と格闘を演じるあらゆる運動は、いずれも野蛮への後退なのである」と批判している。

大戦間に最大の時代的問題をなしたのは、二つの全体主義革命という現実である。それらはイギリスの名誉革命やアメリカの独立革命、そしてフランス大革命とは根本的に異質なものと見なされた。市民による市民のための近代革命にたいし、それは群衆による群衆のための二〇世紀革命なのだ。勃興するナチズムの脅威に直面していたドイツ知識人が、現代的な現象である群衆存在の秘密を探ろうと努めたのは当然のことだろう。ベンヤミンはまさに、そのような視点から群衆存在について論じ、探偵小説形式に深甚な関心をよせた。

(5) 大戦間の時代に新たな文学形式である探偵小説が、知識人や大衆から熱狂的に歓迎されたのは、それがグレート・ウォーにおける死の大量化、匿名化、無意味化という二〇世紀的な必然性から、虚構的にせよ逃れでるものと見なされたからだろう。探偵小説における虚構の死は、機関銃や毒ガスで大量殺戮された兵士の現実的な死の対極に位置する、選ばれた特権的な死である。ひとりの被害者に死をもたらそうとして、犯人は狡知の限りを尽くし、事件の真相を見破るために探偵は、あたう限りの叡知を傾注する。探偵小説において人為的に演出される輝かしい死のイメージは、大量死を模倣した大量生の波間を無力に漂うしかない大戦間の読者に、圧倒的な興奮と魅惑をもたらしたに違いない。

（笠井潔『探偵小説論序説』による）

〔問一〕 傍線(1)「文中の「二十世紀」には、二〇世紀初頭のベル・エポック期は含まれていない」とあるが、なぜ「ベル・エポック期は含まれていない」のか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A ベル・エポック期は、人間の支配的な存在様式として「群衆」がその社会の中に顕在化した時期だから。

B ベル・エポック期は、全体主義革命が、市民による市民のための近代革命に取って代わった時期だから。

C ベル・エポック期は、その社会が、他人と相互交換されうる無名の存在の集積であるような時期だから。

D ベル・エポック期は、人々が「小集団」として、まだそれぞれに固有の場所を与えられえた時期だから。

E ベル・エポック期は、社会の中の個人が、もはや独立自存した特権的な主体ではありえない時期だから。

〔問二〕 空欄(2)(3)(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはならない。

A なぜなら　B ところで　C かくて　D だが　E それでは　F それでも

〔問三〕 次の文A～Eのうち、本文の「群衆」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 互いに類似した無名で平等な個人の無構造的集合。

B モスコヴィッシにより「群れ」と区別された概念。

C 市民革命後に大量に誕生した個体化された共同体。

D 他人と交換不可能な個人による束の間の存在様式。

E 第一次大戦の殺戮により大量死に転化した大量生。

〔問四〕 傍線(5)「大戦間の時代に新たな文学形式である探偵小説が、知識人や大衆から熱狂的に歓迎された」に関して、次の文ア～オのうち、本文の主旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 大戦間における探偵小説の流行の前提には、内面性や精神性を失い空洞化した人間の存在様式がある。

イ 大戦間における探偵小説の流行には、自己実現を試みる能動的な主人公が読者にもたらす魅惑がある。

ウ 大戦間における探偵小説の流行は、人間の無意味化や匿名化からの逃避のひとつであると考えられる。

エ 大戦間における探偵小説の流行とファシズムの背景には、群衆存在という共通した現代的現象がある。

オ 大戦間における探偵小説の流行は、第一次大戦における大量死を模倣する新たな文学への興奮である。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

心もとなきもの。人のもとにとみの物縫ひに(1)やりて、「いま、いま」と苦しうゐ入りて、あなたをまもらへたる心地。子産むべき人の、そのほど過ぐるまでさるけしきもなき。遠き所より思ふ人の文を得て、かたく封じたる続飯（そくひ）などあくるほど、いと心もとなし。物見に遅く出でて、ことなりにけり(2)。白きしもとなど見つけたるに、近くやり寄するほど、わびしう、下りてもいぬべき心地こそすれ。(3)知られじと思ふ人のあるに、前なる人に教へて物言はせたる。(4)いつしかと待ちいでたるちごの、五十日・百日などのほどになりたる、行く末いと心もとなし。

とみのもの縫ふに、なま暗うて針に糸過ぐる。されど、それはさるものにて、ありぬべき所をとらへて、人にすげさするに、それも急げばにやあらん、とみにもさし入れぬを、(5)「いで、ただなすげそ」と言ふを、「さすがになどてか」と思ひ顔にえ去らぬ、にくささへ添ひたり。

何事に(6)もあれ、急ぎてものへ行くべき折に、「まづ我さるべき所へいく」とて「ただいまおこせん」とて出でぬる車待つほどこそ、いと心もとなけれ。大路（おほぢ）行きけるを(7)「さななり」とよろこびたれば、外（ほか）ざまにいぬる、いとくちをし。まいて、「物見に出でん」とてあるに、「ことはなりぬらん」と人の言ひたるを聞くこそわびしけれ。

子産みたる後の事のひさしき。物見・寺詣でなどにもろともにあるべき人を乗せに行きたるに車をさし寄せて、とみにも乗らで待たするもいと心もとなく、(8)うち捨ててもいぬべき心地ぞする。また、とみにて炒（い）り炭おこすも、いとひさし。人の歌の返しとくすべきを、え詠み得ぬほども心もとなし。懸想人などはさしも急ぐまじけれど、おのづからまたさるべき折もあり。まして、女も、ただに言ひかはすことは、「時こそは」と思ふほどに、(9)あいなくひがごともあるぞかし。心地のあしく、もののおそろしき折、夜のあくるほど、いと心もとなし。

（『枕草子』による）

注　とみの……急ぎの。　続飯……飯で作ったのり。　白きしもと……行列の先導がもつ杖。
針に糸過ぐる……針から糸がぬける。　炒り炭……あぶって火をつきやすくした炭。

〔問一〕傍線(1)(2)(6)の「に」の文法的説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

A　格助詞　B　接続助詞　C　並列助詞　D　完了の助動詞　E　断定の助動詞

〔問二〕傍線(3)「知られじと思ふ人」、(4)「いつしかと」、(5)「いで、ただなすげそ」の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(3)　知られじと思ふ人

A　わたしがいることにお気づきにならないと思う人
B　わたしがいることに気づくことができないように思う人
C　わたしがいることを知らないだろうと思われる人
D　わたしがいることを知られないようにしようと思う人

(4)　いつしかと

A　早く大きくなれと
B　大きくなるのが早すぎると
C　いつの間にか大きくなったと
D　気がつかないうちに生まれていたと

(5) いで、ただなすげそ

A あら、そんな通し方では駄目
B さあ、さっさと通して頂戴
C いや、もう通さなくて結構
D おや、もう通してしまったのね

〔問三〕 傍線(7)「さななり」の解釈として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 時間からすると、大路を行く車が、待っていた車であるにちがいない
B 大路を行く車の音からすると、待っていた車が帰って来たようだ
C ひとから聞いた話では、大路を行く車は、待っていた車だということだ
D わたしが見たところ、大路を行く車は、待っていた車みたいだ
E 大路を行く車は、待っていた車そのものではないように思われるのだ

〔問四〕 傍線(8)「うち捨ててもいぬべき心地ぞする」と思う理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 自分は一緒に楽しもうと思っているのに、急いでくれないのを見ると相手にそんな気持ちがないように思われるから。
B 自分は一緒に楽しむつもりで迎えに行ったのに、突然のことであわてさせる結果となって申し訳ないと感じるから。
C 自分は一緒に行くつもりでいたが、相手はそんなつもりがなかったのを見ると、その場から立ち去りたくなるから。
D 自分は一緒に車に乗るつもりで待っているのに、相手はそんなつもりがないことがわかって気まずくなったから。
E 自分は一緒に行こうと頼まれて迎えに行ったのに、頼んだ相手が準備もしていなかったことが腹立たしいから。

〔問五〕 傍線(9)「あいなくひがごともあるぞかし」の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A ひとごとながら書き間違いもあったりするものだよ

B 自分には何の関係もないとばっちりを受けることもあるのだよ

C 不本意にも自分の気持ちを取り違えられることもあるのだよ

D 根拠なく思い込んでいた間違いもあったりするのだよ

E 何の関係もないのに人から悪口を言われることもあるのだよ